入選

水のありがたさ

福島県立会津学鳳中学校　二年　遠藤（えんどう）　百恵（ももえ）

水の色は何色なんだろうか。ある人は「水色」と答えるかもしれないが、ある人は「茶色」と答えるかもしれない。私は、本当の水は何色なのだろうと時々思う。水の色は、「透明」であると思う。なぜなら、水は様々なかたち、色などに変化し、人間や動物などの世界全体でなくてはならない存在にあるからだ。もし、この世から水が無くなってしまうとしたら人類や生き物はどんな反応をするのだろうか。現代世界での水の在り方は国々ごとに違うだろう。例えば、日本はアフリカなどの他の国と比べて水がきれいで、いつも使いたい時にすぐ使える環境にある。だから、日本人は「水」がどれだけ貴重で大切かを考えない人が多くいるのではないだろうか。それと比べてアフリカでは「水」はどのような存在なのだろう。きっと私の想像を上回るほど尊いものなのでは…と感じている。私たち日本人は一つ考えなければいけないことがあると思う。それは、「節水」のことで、これからの将来に向けてとても大事なことだと思っている。

「魚の目に水見ず」ということわざがある。これは、身近にあって、自分にかかわりの深いものはかえって気づかないことという意味である。本当に今の水の利用の仕方が正しい使い方なのだろうか。

「水に流す」という慣用句があるが、私は一番好きである。過去のいざこざなどをすべてなかったことにするという意味なのだが、人は簡単に気持ちを変えてしまうことだってある。そう簡単にはできない。自分のことであれば早く消したいと思うが、他の事だとなかなか、なかったことにはできないと思う。でも、心の器を広げ、成長につながることだか

ら、私は好きなのである。

私は、皆に、「水」はどれだけ大切で、どれだけ身近なパートナーであるかを伝えたい。そして、日々「日常」を送れることは、だれかの水を守り続ける『頑張り』があるからだということを分かってほしい。

私は正直、私一人が節水したところで何も変わらないのではないかと思っていた。しかし、世の中には蛇口なんて存在しない国が多くあること、水がきれいではなく、病気になりながら汚い水を使っていること。つまり、安心して水を飲める国は限られていることを中学に入り、深く考えるようになったのである。日本でも時折、水不足の予測でニュースに流れることがあるが、日本人でもあたり前だと感じている日常は他の国と比べると、日本人の努力の上に日常が維持されている事がわかって感謝に思う。蛇口をひねればすぐに水は出てくる。あたり前のようにお風呂に入り、トイレへ行き、顔を洗う。これが、幸せなことだということに気づいてほしい。私たちの目に見えない部分に下水処理場や浄水場があるが、下水処理場はどうしても汚いと思ってしまうが、下水処理場がなければ日本は感染症などが多発してしまうだろう。

また、浄水場もないと蛇口からきれいな水が出なくなってしまうのである。中には、井戸水といったような人工で作られてはいない天然の水もある。

人間は、体の約七十パーセントが水でできているのだから、「水」がなければ生きていけない。つまり、「水」は生命にとってかけがえのない存在だ。水がいつ、どこでどのようにしてきえてしまうかなんて、だれも予想しないだろう。それは先人たちが水に対して維持しながら、新しい開発も続けてきてくれたことの結果だと思っている。だから、日本は素晴らしい国なのである。先人たちが私たちを守ってくれたことに私は感謝している。

「水は何色なのだろう」この答えはだれにも分からない。それは、多くの人たちの思いが込もった尊いものだから。